

平成廿六年四月二日

余、左耳難聴なり。補聴器着用せり。

補聴器は水を嫌ふ。夏季には補聴器全體を小さき布の袋にて覆ひ、汗に濡るるを防ぐ。其袋、販賣店にては安價ならず。百圓均一店にて手袋購入し、指先の部分を切り取て代用す。

使用開始後早や二年を経ぬ。使ひ始めはつい先日 of 如きも、この補聴器既に體の一部となり、取り外さずして風呂に入りて頭から湯を冠りたる事二度あり。慌ててティッシュにて水分拭き取り乾燥剤の入りたる容器に収納、翌朝補聴器販賣店に持ち込み點驗せり。

此の三月、補聴器の保證期間滿了す。其の直前に分解點驗に出せり。一週間程預るとの事にて、その間は同じ機種を余の物と同様に調整し貸與を受く。同様の筈なるに、何故か音質少々異なれり。體の一部と化したる物にて微妙なる相違にも敏感なり。

點驗無事終了、久方振りに聴力測定せんとの事なり。されど風邪氣味にて正常なる右耳、少々音の籠る感あり。されば調子の戻りたるを待ちて聴力検査せん、右耳の異常なるは念の爲耳鼻科受診すべしとの助言有り。

耳鼻科醫曰く、左耳、慢性中耳炎なり。先づは其の完治を圖るべしと言ひて抗生物質投与せり。來週再來院せよ、との事なり。

余の左耳難聴に今迄六七人の耳鼻科醫にかかりつ。或るは高度の技術あるも、患者の心には氣配りなく、或るは「體質的なり」と言ふのみにてはかばかしき治療なし。至極普通の今回の醫師に漸く満足の念を覺ゆ。